

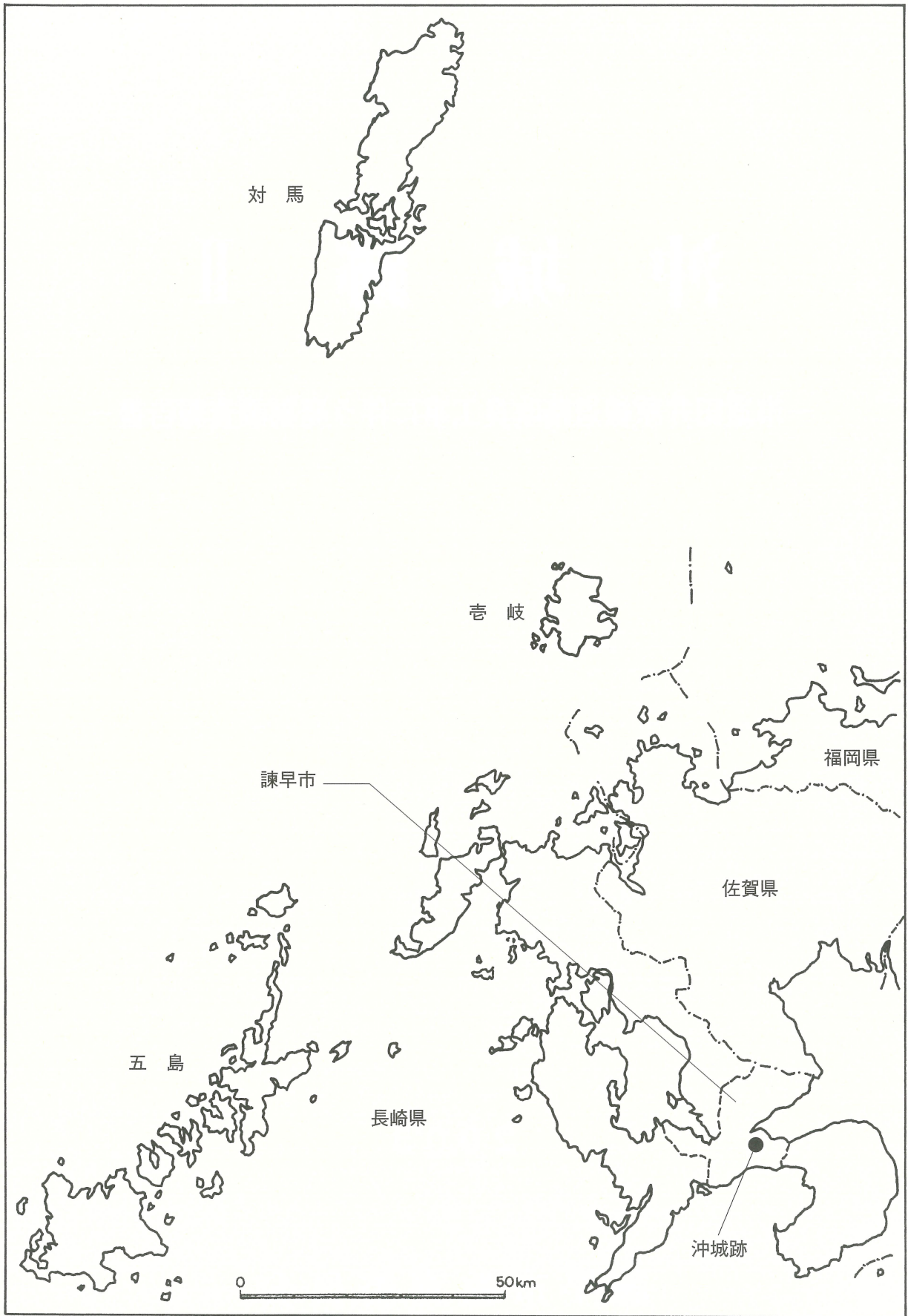
諫早市文化財調査報告書 第18集

# 沖 城 跡 II

—市道田井原線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2005

諫早市教育委員会



第1図 諫早市の位置

## 発刊にあたって

長崎県の中央部に位置する諫早市は、古代官道の「船越駅」の所在が想定され、近世においては長崎街道が整備されるなど、交通の要衝としての地理的な特性を活かし、その歴史を刻んできました。

そして、本年3月1日には諫早市・多良見町・森山町・飯盛町・高来町及び小長井町との1市5町による合併により、新「諫早市」として新たな一歩を踏み出したところであります。

沖城跡は、中世期に諫早地方を治めていた西郷氏の支城として築かれ、後の領主諫早家初代家晴が隠居をしたとの言い伝えが残っています。

今回の調査は、平成9・10年度に引き続く第3次調査となり、調査結果については本書記載のとおりですが、今回得られました資料が本書とともに、今後の歴史研究の一助として活用されるだけでなく、文化財保護への理解を深める契機となることを切に願う次第であります。

発刊にあたり、発掘調査及び整理作業に従事していただきました皆様をはじめ、関係各位に賜りました深い御理解と多大なる御協力に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

諫早市教育委員会

教育長 峰 松 終 止

# 例 言

1. 本書は、市道田井原線道路改良工事に先立って平成16年度に緊急調査を行った沖城跡3次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は諫早市土木部道路課からの委託を受けて、諫早市教育委員会文化課が行った。調査体制については下記のとおりである。

諫早市教育委員会	教 育 長	峰松 終止
	教 育 次 長	田鶴 俊明
	文 化 課 長	松本 玉記
	同 参 事	永 渕 高信
	同課長補佐	川内 順史
	同 参 事 補	秀島 貞康
	同事務職員	川瀬 雄一（調査担当）

3. 3次調査は
  - 1次調査－平成9年度・平成10年1月12日～平成10年3月31日
  - 2次調査－平成10年度・平成10年12月2日～平成11年2月5日で実施できなかった個所について、下記の期間で行った。
  - 3次調査－平成16年11月10日～平成16年12月16日
4. 遺物の整理・実測・拓本と遺構・遺物のトレースは川瀬が行った。
5. 本書の執筆、編集は川瀬が行った。
6. 溝状遺構から出土した杭については、AMS法による年代測定を(株)パリノサーヴェイに委託した。
7. 本書関係の出土遺物と図面及び写真類は、諫早市郷土館で保管している。

# 本文目次

第I章 遺跡と調査の概要	1
第1節 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	1
第2節 調査の概要	4
1. 調査に至る経緯	4
2. 調査方法	4
3. 基本的層位	6
第II章 遺構	7
第1節 1・2次調査出土遺構の概要	7
第2節 3次調査出土遺構	7
1. 溝状遺構	7
第III章 遺物	10
第1節 遺物の概要	10
第2節 出土遺物	10
1. 陶器	10
2. 磁器	12
3. 木製品	14
4. 金属製品	14
第IV章 まとめ	19
付編 放射性炭素年代測定分析結果	21

## 挿 図 目 次

第1図	諫早市の位置	
第2図	周辺遺跡分布図 (S-1/25,000)	3
第3図	1~3次調査トレンチ配置及び出土遺構位置図	5
第4図	土層模式図	6
第5図	C-6~A-4溝状遺構位置図 (S-1/400)	8
第6図	3次調査トレンチ設定位置図 (S-1/200)	8
第7図	A-4溝状遺構平面図 (S-1/60)	9
第8図	A-4溝状遺構杭列断面図 (S-1/30)	9
第9図	A-4溝状遺構土層図 (S-1/30)	9
第10図	陶器実測図 (S-1/3)	13
第11図	磁器実測図 (S-1/3)	15
第12図	木製品実測図① (S-1/4)	16
第13図	木製品実測図② (S-1/3)	16
第14図	金属製品実測図 (S-1/2)	16

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	3
第2表	調査面積集計表	5
第3表	出土遺物集計表	11
第4表	陶器観察表	17
第5表	磁器観察表	18
第6表	木製品観察表	18
第7表	金属製品観察表	18

## 図 版 目 次

図版1	調査地点全景・溝状遺構検出面・溝状遺構検出状況
図版2	溝状遺構検出状況・溝状遺構に伴う杭列
図版3	陶器 (内面)・磁器 (内面)
図版4	陶器 (外面)・磁器 (外面)
図版5	木製品・金属製品・陶磁器 (立面)・磁器銘款

# 第Ⅰ章 遺跡と調査の概要

## 第1節 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

沖城跡は諫早市仲沖町及び幸町（大字では「仲沖名」と「船越名」との境界、小字では「城島」）に位置し、諫早市立諫早小学校の眼前に広がる水田に立地する。

この地域は、県内唯一の一級河川である本明川と半造川とが合流する地点に位置する。現在、2つの河川は、合流したあと2kmほどで有明海へと達するが、慶長10年に描かれた『慶長肥前国絵図』では、それぞれの河川は別々に海へと注いでおり、城が立地していた地域も、直に有明海とつながった岬状の突端部として描かれている。

詳細については、1・2次調査の結果について記載した諫早市文化財調査報告書第14集『沖城跡』（平成11年度発行・以下『沖城跡』）に記載したとおりであるが、沖城は、眼前に有明海が開けた地理的要因からこの地に立地していると考えられる。その後、この地域は、周囲に「二丁籠」、「佐馬祐籠」、「六佐衛門籠」といった、干拓にちなんだ「籠」地名が残されているように、17世紀代の干拓が行われ、時期が大きく下がって昭和37年から41年にかけて行われた大規模な土地改良事業により、地形は遺跡が営まれた時期から大きく改変されている。

前述した土地改良事業以前の状況は、空中写真・地図・字図・絵図などの各種資料から知ることができる。昭和22年4月に米軍が撮影した空中写真（『沖城跡』巻頭）を見ると、事業実施以前は、大小さまざまな形状の水田（畑）が混在し、半造川寄りでは水田（畑）が放射状に広がっていることや、幹線的な水路から枝別れした多くの小水路が走っていることがわかる。また、当地の小字名である「城島」の中に鍵形の、「大沖道下」には正方形の区画があり、この周囲は溝（堀）で囲まれているという様子もわかる。「城島」の鍵形の区画については大正15年測量の地図（『沖城跡』3ページ）にも記載されている。また眼鏡橋架橋（1839年）以前に描かれた諫早旧城下図には、周囲一帯が水田である中に、樹木らしきものが描かれた部分があり、この部分が沖城であると思われる。

### 2. 歴史的環境

高来郡西郷（南高来郡瑞穂町西郷）に興った西郷氏は、尚善の時に船越城（諫早農業高校付近）に入り、文明3（1470）年には高城を築き、領内にいくつかの支城を配したと言われる。沖城跡は、その支城の一つであり、「沖城（支城）仲沖町 後に家晴の隠居所となる。遺跡を城島という。」との説がある（註1）。

しかし、この地で百年の治世を誇り、尚善・純久・純堯と三代にわたって繁栄した西郷氏であるが、純堯の子信尚が秀吉の島津征伐に参陣しなかったため、所領を召上げられることとなる。この城で隠居したと伝えられる龍造寺家晴は、島津討伐後の秀吉の「国割」に際し、居城である柳河城を含め、知行の安堵を受けなかったため、その代替地を要求した。これに対し

秀吉は諫早2万2502石5斗を安堵した。しかし、西郷氏が居城の明け渡しに応じなかったため、家晴は天正15（1578）年に西郷信尚を攻め、高城を奪った。以上が、沖城が築かれたと思われる時期から、龍造寺氏が諫早へ入るまでのおおまかな経過である（『沖城跡』2ページ）。

沖城が作られたといわれる中世期に関しては、文書資料が極めて乏しいため、それを補う方法の一つとして、地形や字名から諫早の中世についての考察を試みようとした先学の研究がある（『沖城跡』2ページ）。

周辺の主な遺跡については、以下に列挙する（第2図）。

○高城—「四方に高櫓を構え、多数の矢狭間があり、（中略）東に大手口、本門、桜馬場があった」という記録が残っている（註2）。朝鮮系中世瓦が採集され（註3）、土塁や空堀の痕跡をとどめている。

○諫早農業高校遺跡—本明川南岸の微高舌状台地にあり、明治39年の校舎建設時には32個の甕棺が出土したと伝えられ、このうちの一つから銅剣が出土している（註4）。

○船越城—鎌倉時代末期の領主船越氏が築いたとされる。文明年間に西郷尚善が本拠にしたが、龍造寺氏が領主となってからは廃された。具体的な場所については不明である。

○船越駅—古代官道の駅伝制度に伴う駅が置かれたと想定されている。『延喜式』によると、高来郡内には「新分」・「船越」・「山田」・「野鳥」の四駅が置かれた。『令義解』によると、「大路」に駅馬二十匹・「中路」に十匹・「少路」に五匹が置かれたが、船越駅はこのうちの「少路」にあたる。船越城と同じく具体的な場所については不明である。

○田井原条里遺跡—船越丘陵の裾部分にある。成立年代については判然としないが、出土した須恵器から、少なくとも8世紀後半以降であると想定される。船越駅に伴う駅田官給地と推測され、空中写真（『沖城跡』巻頭）では1町四方が9区画ほどの短冊形の地割が認められる。ここ数年、市中心部に近接しているという利便性のため、分譲宅地・店舗建設が行われ、その都度、範囲確認調査を行っているが、条里に伴う遺構などはこれまでのところ確認できていない。

#### 【参考文献】

註1 諫早市役所 1955『諫早市史第1巻』「第5編 中世」

註2 牟田五月男・山部 淳編 1975「西郷記」『諫江史料拾録』

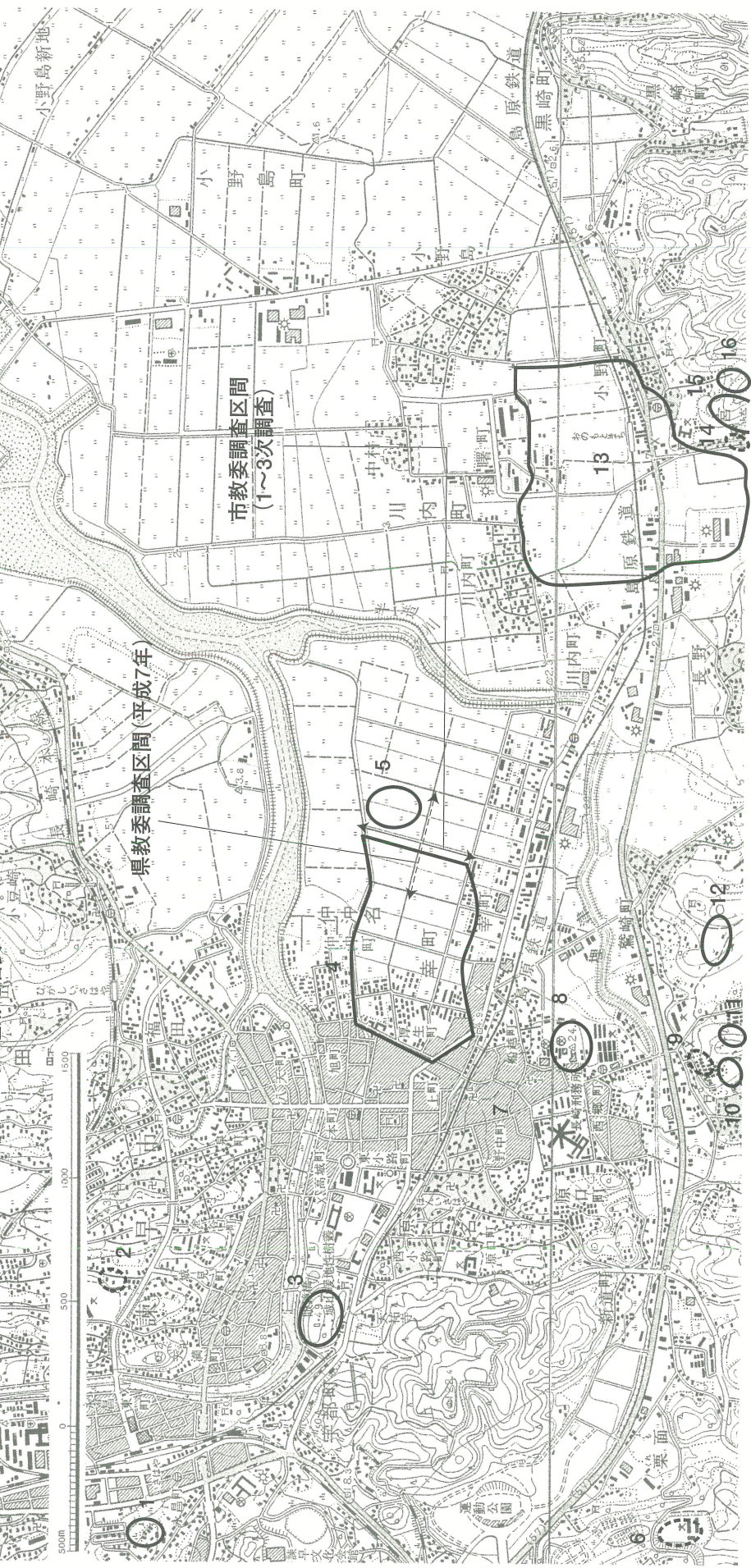
註3 橋本幸男 1992「長崎県諫早市・大村市出土の朝鮮半島系中世瓦について」『古文化談叢第27集』（九州古文化研究会）

註4 正林護 1971「諫早市出土の銅剣」『九州考古学 No.41~44』（九州考古学会）



番号	遺跡名称	種別	立地	時代	備考	番号	遺跡名称	種別	立地	時代	備考
1	永昌遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文		9	小栗B遺跡	墳墓	丘陵	弥生	消滅
2	金谷遺跡	〃	〃	弥生	消滅	10	小栗A地点遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生	
3	高城跡	城跡	丘陵	中世		11	小栗B地点遺跡	〃	〃	弥生	
4	田井原条里遺跡	条里遺構	平野	中世		12	十仙平遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文	
5	沖城跡	城跡	〃	中・近世		13	小野条里遺跡	条里遺構	平野	中世	
6	平山B遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器~弥生	消滅	14	小野古墳	古墳	丘陵	中世	消滅
7	船越駅・船越城想定地	駅・城跡	丘陵	古代・中世	〃	15	宮崎館遺跡	遺物包含地	〃	旧石器・中世	
8	諫早農業高校遺跡	墳墓	丘陵	弥生・古墳	〃	16	小野城跡	城跡	〃	中世	

第1表 周辺遺跡地名表



第2図 周辺遺跡分布図 (S-1/25,000)

## 第2節 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯

沖城跡については、平成7年度に長崎県教育委員会が諫早南部5期地区農免農道整備事業に伴う緊急発掘調査を行っている（註1）。この時の調査は、市道田井原線を中心とし、この東西にそれぞれ200mの総延長400m、面積にして2,000㎡について行われた（第2・3図）。調査の成果としては、家晴の時期と矛盾しない年代（16世紀後半～17世紀初頭）を主体とする陶磁器などの遺物が多数出土したほか、石組遺構などが検出された。

その後、市道田井原線道路改良事業に伴い、諫早市教育委員会が平成9年度（以降「1次調査」）・平成10年度（以降「2次調査」）に緊急発掘調査を行った（第2・3図）。道路拡幅面積のうち計2,121㎡について調査を行い、国産磁器焼成以前の輸入磁器・国産陶磁器・瓦・木製品・鑄造関連の輔羽口・埴塙などの遺物や、溝状遺構・道路状遺構・鑄造関連土壌群が検出されるなど多くの成果を得た。

前回の道路改良事業の際に未買収のため工事施工ができなかった個所について、平成16年度に事業実施の計画がなされた。これに伴い、事業担当課である諫早市土木部道路課より平成15年9月11日付15諫道第104号で、同個所についての埋蔵文化財の所在の有無についての照会が諫早市教育委員会文化課へなされた。文化課では、この個所が1次調査「C-6」で検出された溝状遺構の延長線上にあり、同様の遺構が検出される可能性が高いと判断し、平成15年9月17日付15諫教文第191号で、工事着手前の発掘調査が必要であるとの回答を行った。その後、市土木部道路課と同教育委員会文化課が協議を行ない、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に達したので、諫早市長名で文化財保護法第57条の2の規定による書類の提出がなされ、これを受け、諫早市長と諫早市教育長との間で調査委託に関する覚書を締結し、緊急発掘調査（以降「3次調査」）を行うこととなった。

### 2. 調査方法

調査は、市道田井原線道路改良事業に伴う道路幅部分のうち、延長30m・幅4mの計120㎡について行った。（第3・5・6図）。

トレンチの呼称については、1次・2次調査において、市道田井原線と諫早南部5期地区農免道路の交点を基準とし、この北東部分をA区、南東部分をB区、北西部分をC区、南西部分をD区とし、それぞれ北側から南側へ向かってA-1、A-2…、B-1、B-2…、C-1、C-2…、D-1、D-2…としていたが（第3図）、これにもとづき、今回の調査箇所を「A-4」と呼称した。

遺物の取り上げについては、遺構外のものについては層ごとに、遺構に伴うものは番号を付して取り上げを行ない、10分の1で図化した。



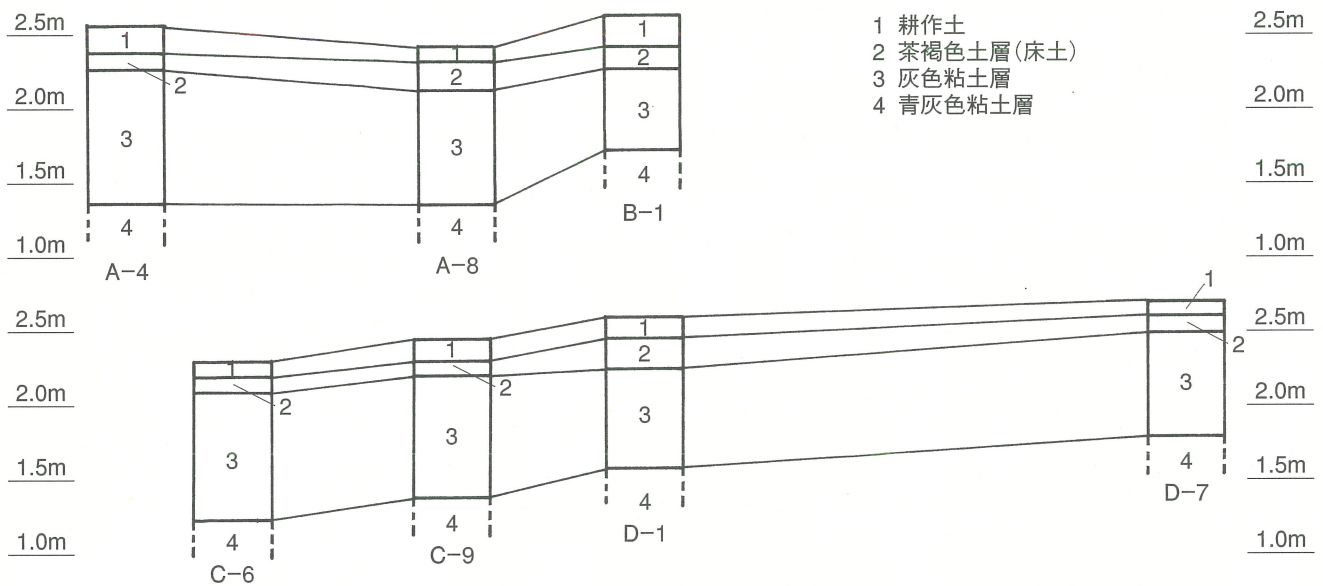
### 3. 基本的層位 (第4図)

調査対象範囲の水田面は、南端(2次調査・D-7)で標高2.75m、北端(1次調査・A-1)で標高2.2mであり、現地形は南側から北側へ向かって傾斜している。

層位は、1~3次調査範囲でほぼ共通しており、1層-耕作土、2層-茶褐色土層(床土・鉄分沈殿層)、3層-灰色粘土層、4層-青灰色粘土層に分層される。遺物は3層まで含まれ、溝状遺構などの遺構面もこの層にある。層厚はおよそ50~80cmで、水分を含んだやや軟弱な層である。乾燥すると縦にクラックが入り、深度が深くなると壁面が崩落する危険性があるため、部分的に未掘の箇所が生じた。この3層は、灰色味の強い上層と黄茶色味の強い下層とに分かれ、遺物は上層に多い傾向がある。4層は青灰色を呈する還元度の強い潟土で、一般に有明粘土と呼称されるものである。この層に至ると無遺物となり、自然貝層が認められる。この層の上面は水田面下90cm~1mで表出し(標高は1.4~1.9m)、南側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。

#### 【参考文献】

註1 高野晋司ほか 1998『沖城跡』(長崎県文化財調査報告書第143集 長崎県教育委員会)



第4図 土層模式図

## 第Ⅱ章 遺 構

### 第1節 1・2次調査出土遺構の概要

1・2次調査では、溝状遺構・道路遺構・鑄造関連土壌群などが出土し、溝状遺構・道路遺構は、市道を挟んで検出された（第3図）。

溝状遺構は城の内外を区画する堀の役割を持っていたと思われ、幅2.4～2.7m・深さ0.5～1.3mほどである。この遺構には、昭和37～41年に行われた土地改良事業により削平された城跡の土砂が押し流されたために埋没したものと、17世紀初頭の段階で埋没しているものがある。これは遺構から出土する遺物の時期により判断され、前者の遺構からは江戸時代～現代までの長期にわたる時期の遺物が出土した。

道路遺構は溝状遺構に隣接する硬化面として検出され、杭列を伴っていた。幅は2.5mほどである。

鑄造関連土壌群は3×3mほどの隅丸方形の土壌を主体とし、粘土・灰・砂・るつぽ・韃羽口などの鑄造関連の遺物が出土した。土壌に伴って、柱が1.5～1.6m間隔で検出されたことから、何らかの施設を伴っていたと思われる。遺構内の遺物は国産陶器と輸入磁器で占められ、17世紀初頭の肥前磁器を含まない時期の共伴・埋没関係を示している。

### 第2節 3次調査出土遺構

#### 1. 溝状遺構（第7～9図）

1次調査のC-6で出土した溝状遺構の延長線上で、同様の溝状遺構を検出した。

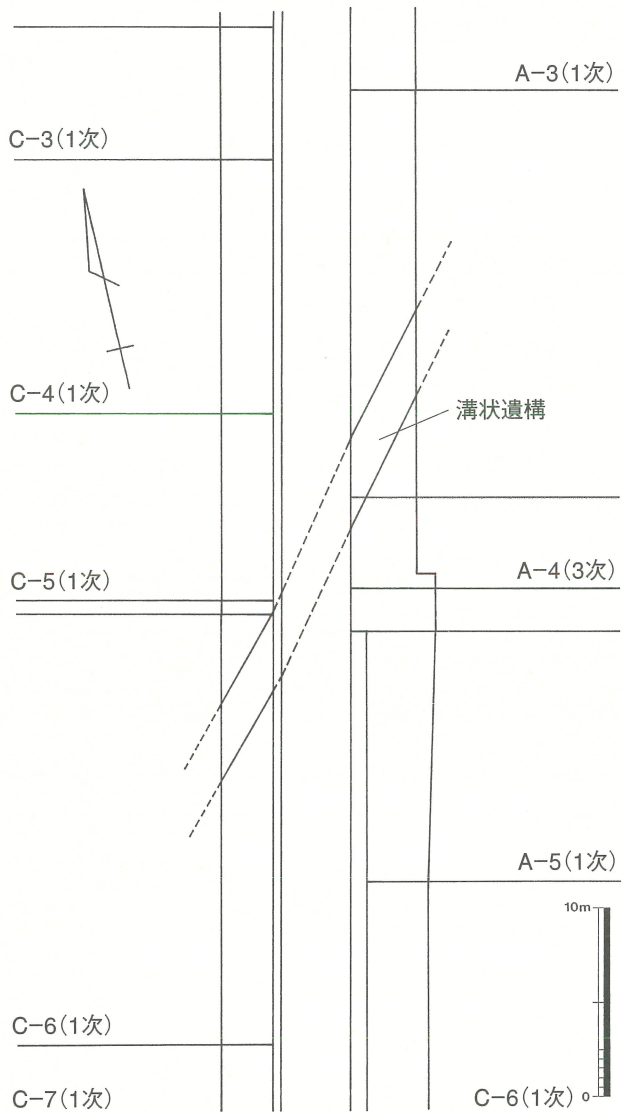
現地表下0.5mで検出し、検出面の標高は2.2mである。溝の上面幅2.6m、下面幅1.8mで、深さは0.7mである。

C-6の溝と異なるのは杭列を伴っていることで、溝の西側で杭26本を検出した。溝の東側には杭は見られなかった。杭の直径で最大のもは12cmで、全体としては直径5～6cmのものと、直径8～10cmのものに大別される。杭の長さは、No.10の杭が長さ1.43mであった。マツ材を使用し、杭間には小枝を横に置く「しがらみ状」としている。

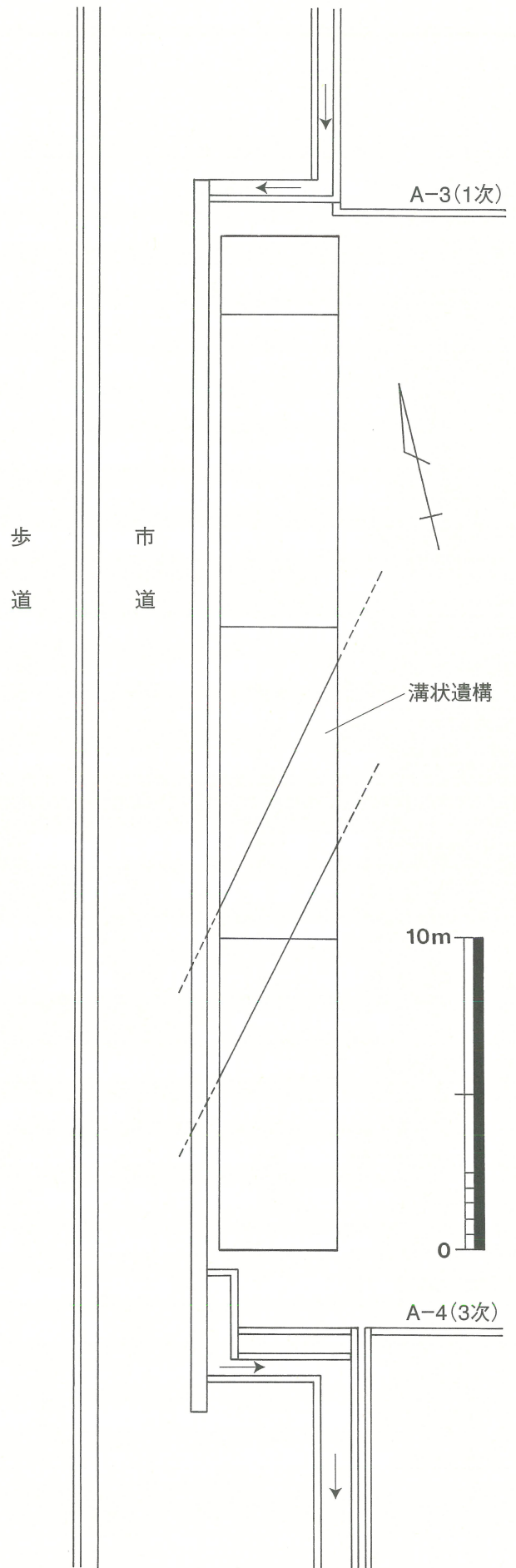
No.10の杭についてはAMS方による年代測定分析を行い、150±40 y. B. P. (1950年を基準)の測定値が出た。測定結果の詳細については付編を参照願いたい。

断面の土層に関しては、1層は褐色で繊維状の木質を含む。2層は灰色で、水分を多く含む。3層は灰黒色で、水分を多く含み、ヘドロ臭がする。

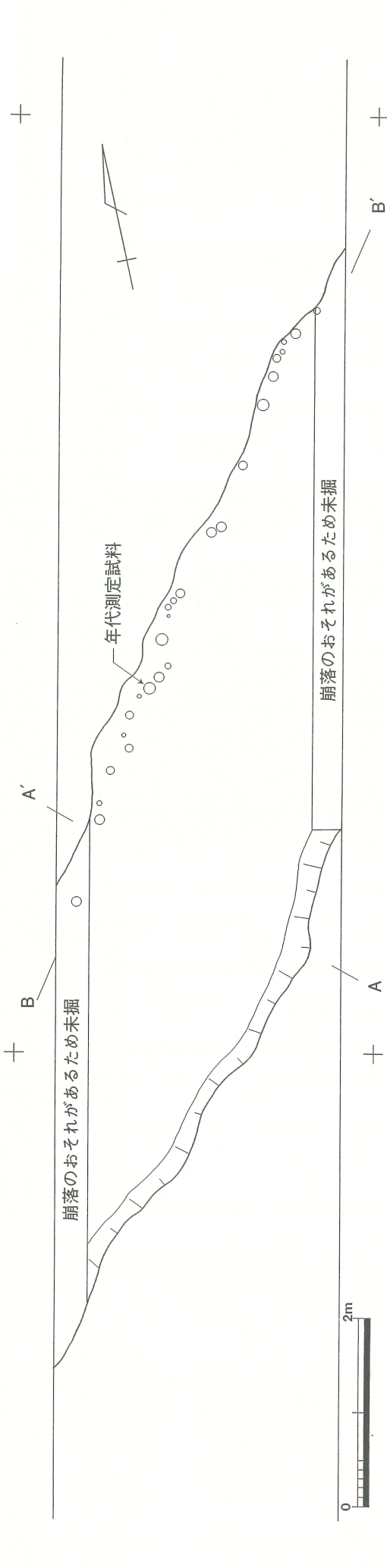
遺構内からは陶磁器（京焼風碗・仏飯碗）や木製品（下駄・墨書表札）などが出土した。上層からは明治期の磁器などが出土した。



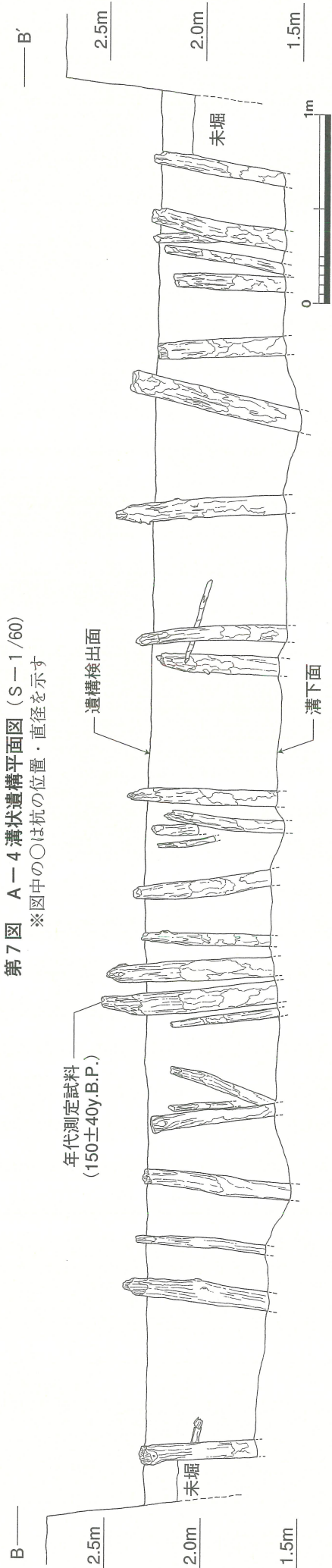
第5図 C-6～A-4 溝状遺構位置図 (S-1/400)



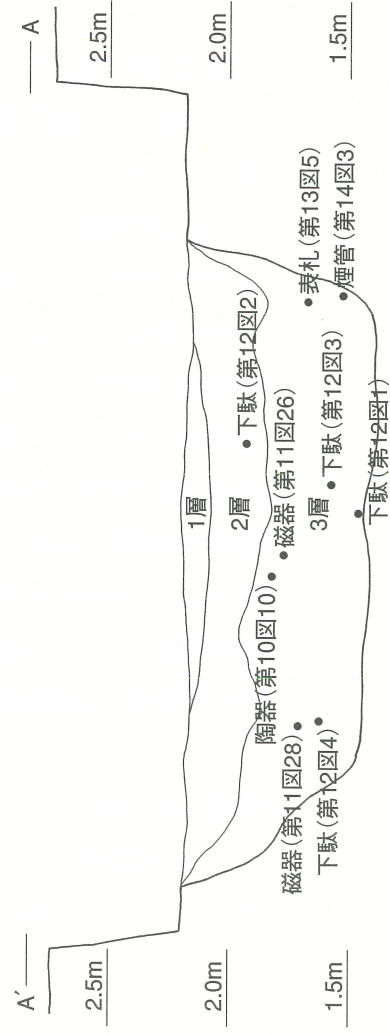
第6図 3次調査トレンチ設定位置図 (S-1/200)



第7図 A-4 溝状遺構平面図 (S-1/60)  
 ※図中の○は杭の位置・直径を示す



第8図 A-4 溝状遺構杭列断面図 (S-1/30)



第9図 A-4 溝状遺構土層図 (S-1/30)

- 1層 褐色粘土層 一纖維状の木質を多く含む。  
むしろのようなものを敷いた上に土がかぶさる。
- 2層 灰色粘土層 一多量の水分を含み、細かい木質をまばらに含む。
- 3層 灰黑色粘土層 一多量の水分を含む。混入物の目立たない均一した土層。  
ヘド口臭あり。

## 第Ⅲ章 遺 物

### 第1節 遺物の概要

今回の3次調査において570点の遺物が出土した。1・2次調査での出土遺物数は8,429点であったので、1～3次調査での合計は8,999点となる。

陶器が25%と最も多く、次いで磁器が17.7%・瓦が17.6%を占めている。低湿地に立地する遺跡であること、溝状遺構が検出されたことから、木製品も多く、16.5%を占めている。この他には土師質土器・瓦質土器・金属製品が見られる。中世末～近世初頭に属するものが主体であるが、弥生土器・土師器・石鍋・青磁などの時期を遡る遺物や、逆に時期が下がる遺物も見られ、当地が古くから土地利用されており、中世末～近世初頭の家晴の時期以降も遺跡が利用されていたことがわかる。

地点ごとの数量については第3表のとおりであるが、A区-24.3%、B区-29.7%、C区-23.1%、D区-22.9%とB区に多い傾向がある。

今回の報告書では、3次調査出土遺物だけでなく、前回の報告書で掲載できなかった1・2次調査出土遺物についても掲載した。

### 第2節 出土遺物

#### 1. 陶 器 (第10図、第4表、図版3・4)

##### 碗 (1～10)

1は丸形の碗で、2回のケズリで高台脇を作出、口縁部はうすくつまみあげる。高台は竹節状で下に向かってすぼまり、高台内に兜金・ちりめんじわが見られる。内面体部から高台内にかけて黒化している。2は高台内に渦状のケズリが残る。回転方向は時計回り。高台は竹節状で外部に稜がつく。見込がわずかに尖る。3も2と同じく竹節状の高台で外部に稜がつく。見込がわずかに尖る。畳付は内傾する。4は平形の碗で高台が撥形に広がり、高台内部は平坦である。見込は蛇ノ目釉剥ぎである。胎土は精良。5は底部が厚く、どっしりとした感じで、灰釉が一部緑色～水色に発色している。6は高台内まで施釉し、畳付露胎である。高台径がやや大きい。見込がやや盛りあがる。7は高台内に渦状のケズリが残る。回転方向は時計回り。畳付の幅は広い。8は高台内に渦状のケズリが残る。回転方向は時計回り。高台内に段がつく。9は天目碗。10は京焼風の碗で、鉄絵で水草文を描く。高台内は平坦に仕上げる。胎土は精良。

##### 向付 (11・12)

ともに絵唐津で、11は体部から内湾気味に立ちあがる口縁を多角形に成形し、内面に鉄絵で絵付けする。長石釉。12は内外両面に鉄絵で文様を描く。



## 溝状遺構分

トレンチ名	陶器	磁器	瓦			瓦質土器	土器	金属製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角器)	粘土	ビニール	計		
			軒丸	軒平	平												役	
A-4	11	30			10	34	1	1	3	265	1	7				363		
A-8	21	33			17	33	3	3		434	5	11	3		5	575		
B-1	51	49	1	3	33	134	63	144	5	2	64	40	34	2		625		
B-5	11	14				2		3	1		22		1			54		
C-6	23	32			8	26	1	4	36	7	3	247	18	3	13	421		
C-9	7	13			7	11				2	302		8			350		
D-1	25	17			19	58	10	26			12	18	1			186		
D-4	2	8			1	2			10		44		2			69		
計	151	196	1	3	95	300	1	81	213	28	12	1390	64	47	41	2	18	2643

## 土壌分

遺構名	陶器	磁器	瓦			瓦質土器	土器	金属製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角器)	粘土	ビニール	計		
			軒丸	軒平	平												役	
B-1-A	19	2					8	8		4	1		4			46		
B-1-B	5	6				6	2	8	2	36	1		5			71		
B-1-C	8	11				16	4	37	3	3	40	13	1	18		154		
B-1-D	1							3		2						6		
B-1-E	2	2			3	4	2	1		4			9			27		
B-1-F								1		1	2					5		
B-1-G					3					1	1					5		
B-1-H								1								1		
D-2 廃棄	3	4			1	1		3	1		7	1				21		
計	38	25	0	0	4	30	2	17	60	5	5	95	18	0	19	18	0	336

## 層取上分

トレンチ名	陶器	磁器	瓦			瓦質土器	土器	金属製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角器)	粘土	ビニール	計		
			軒丸	軒平	平												役	
A-1						25		1								26		
A-2	13	13			1	28		1					1			57		
A-3	3	6			2	4		4	1							21		
A-4	44	81	1		5	57		3	9	3		2	2			207		
A-5	3	3			2	17		8	2		10					45		
A-6	21	13	1	1	13	55		4	33	8	2	1	2			154		
A-7	20	18	2		4	19		5	8	4						80		
A-8	100	47	1	1	71	168		6	41	10		3	3			451		
A-9	66	30			14	50		9	31	1			4			205		
小計	270	211	5	2	112	423	0	38	128	27	12	0	6	7	5	0	0	1246

B-1	139	81	2	1	17	58		30	192		2		2		1			525
B-2	34	26			2	4		1	22	1								90
B-3	211	71		2	8	32		68	138	2	8				3			543
B-4	81	41			3	19		14	28	1	5	1		8				201
B-5	114	80			2	3		33	22	4								258
B-6	26	11				1			21	1								60
B-7																		0
B-8																		0
小計	605	310	2	3	32	117	0	146	423	9	15	0	3	0	12	0	0	1677

C-1	51	36	1		7	37		7	11	2	1							154
C-2	34	44				21		2	13			1						115
C-3	57	39			3	22		8	19	2								150
C-4	29	30				4			5									68
C-5	21	34	2	10					6				1					74
C-6	28	20	2		9	18		1	22	2				1				103
C-7	111	60			14	33		1	18	5			1					243
C-8	20	27		1	9	4		5										66
C-9	80	59			10	52		4	33	2		2	1	16				259
C-10	23	19			5	8		2	16			3						76
小計	454	368	5	11	57	199	0	30	143	13	1	0	7	3	17	0	0	1308

D-1	132	49			16	61		5	65	5	1		2	1				337
D-2	155	84			27	35		49	79	3	4		3		1			440
D-3	75	67				11		10	26	1			1	2				193
D-4	165	120			3			7	22	2	1		4	3				327
D-5	115	80			4	19		2	39	2	1		3		1			266
D-6	12	10			1			4	8									35
D-7	81	69			3	4		4	27	3								191
小計	735	479	0	0	54	130	0	81	266	16	7	0	13	6	2	0	0	1789
計	2064	1368	12	16	255	869	0	295	960	65	35	0	29	16	36	0	0	6020

## 全体集計表

出土箇所	陶器	磁器	瓦			瓦質土器	土器	金属製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角器)	粘土	ビニール	計		
			軒丸	軒平	平												役	
溝状遺構分	151	196	1	3	95	300	1	81	213	28	12	1390	64	47	41	2	18	2643
土壌分	38	25			4	30	2	17	60	5	5	95	18		19	18		336
層取上分	2064	1368	12	16	255	869		295	960	65	35		29	16	36			6020
総計	2253	1589			1588			393	1233	98	52	1485	111	63	96	20	18	8999
	25.0%	17.7%			17.6%			4.4%	13.7%	1.1%	0.6%	16.5%	1.2%	0.7%	1.1%	0.2%	0.2%	

第3表 出土遺物集計表

### 皿 (13~22)

13は絵唐津の立縁皿で、見込は二段下がり、秋草文を描く。高台内には兜金を残す。見込に胎土目を3箇所残す。14は高台内には兜金を残す。露胎部にモミガラが付着する。15は立縁の皿と思われる。16は高台脇のケズリが明瞭。高台は低い。17は高台内面がアーチ状を呈する。18は畳付の幅が均一でない。三日月高台か。19は端反りの皿。20は丸縁皿で、口縁内外面に濃緑色の線が入る。これは文様ではなく、釉薬のタマリであると思われる。21は立縁皿で高台内まで施釉する。22は見込に砂目跡が5箇所に残る。高台内には時計回りのケズリ。畳付の幅が広く、手ずれしたように平滑である。23は折れ縁の大皿。内面に貫入が見られる。口縁部はわずかに丸く肥厚する。

### 鉢 (24~30)

24は口縁部を折り返し、内面に刷毛目を施す。25は褐釉で口縁頂部をぬぐっている。27は播鉢で、内側に突出した口縁部及び外面に茶褐色の釉がかかる。28は口縁頂部をぬぐっており、貝目跡を残す。29・30は播鉢で、29は口縁部外面に1本の沈線をめぐらす。

### 壺 (31)

31は内面下部に格子状の叩き整形痕を残す。底部にモミガラが付着している。

### 瓶 (32~34)

32・34は釉薬を厚くかけ、32には貫入が見られる。空隙の多い胎土である。33は底部が非常に薄い。

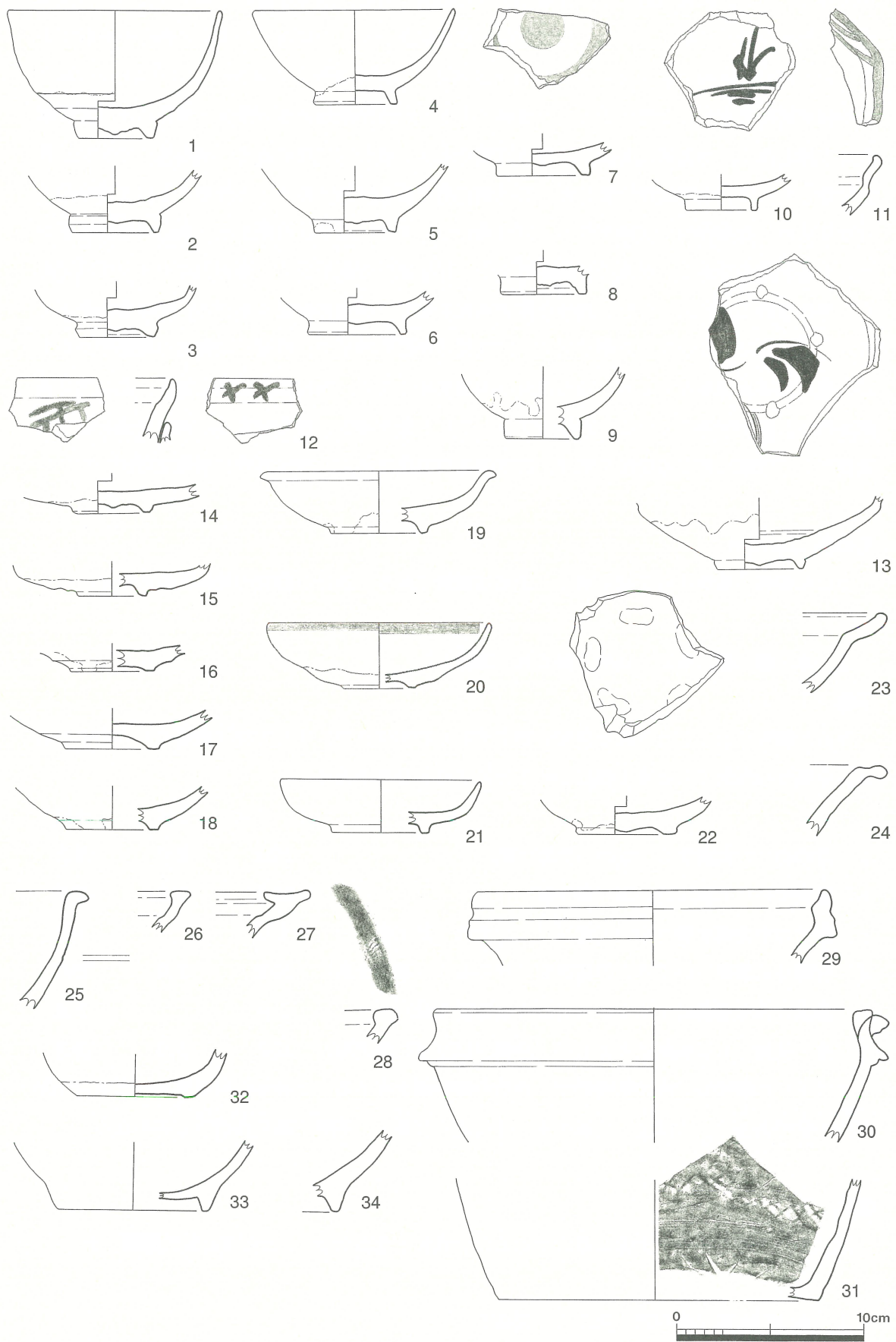
## 2. 磁器 (第11図、第5表、図版3・4)

### 碗・小杯 (1~9)

1は見込が饅頭心状で、畳付に砂が多量に付着している。釉薬は青味がかり、文様はにじんでいる。貫入が見られる。2は高台が高く先端が尖る。3は1と同じく釉薬は青味がかり、文様はにじんでいる。4は皿又は碗で、高台がやや内傾し、高台脇にわずかに砂が付着している。高台内の放射状のカンナ痕が顕著である。5・6は文様構成において似ており、外面にコンニャク印判による桐文を持ち、底部・高台に圏線をもつ。ともに高台に銘があるが、5は不鮮明である。6は圏線内に銘を有する。5の色調はやや青味がかかる。7は梅樹文を描く。8は一重網目を描く。黄緑色を帯びた色調で胎土はわずかに茶色味を帯びる。9は小杯で口縁部が外反する。外面に草花文・内面に圏線をもつ。

### 皿 (10~27)

10~13は見込に草花文を描く呉須絵の大皿である。10は畳付から高台内面にかけて多量の砂



第10图 陶器实测图 (S-1/3)

が付着している。灰色の胎土で、青味がかかった色調である。畳付は釉薬をぬぐわない。11は高台脇に微量の砂が付着している。12は全体が黄色味がかり、中央部がわずかに膨らむ特徴がある。10と同じく灰色の胎土である。14は平成12年に今回調査地から西側へおよそ400mの地点で範囲確認調査を行った際に出土した資料である。内面口縁部に四方禰文、見込には二重圏線内に文様を描く。中央部に向かって凹む特徴があり、高台内に銘がある。高台脇にわずかに砂が付着している。小野分類の皿E群。15は輪花形の皿又は鉢である。内外面ともに文様を描く。16は見込の二重圏線内に文様を持つ。17は薄いつくりで、高台は内傾する。高台内の放射状のカンナ痕が顕著である。呉須の青味が鮮やか。18は畳付の幅が広く、高台内はカイラギ状である。見込がわずかにふくらむ。19は全体が灰色を呈し、中央部が盛りあがる。20は見込がふくらみ、高台脇にしっかりした稜が付く。21は見込が凹む器形で、外面には緑色の釉薬がかかる。22の畳付は平坦面を有するが、23の高台は内傾気味で尖る。24は見込に鹿を描き、高台内に圏線を持つ。砂が付着している。25はボタン(?)と魚を描き、銘を有する。26は見込を蛇ノ目釉剥ぎし、内面に斜文の染付を施す。27は端反の白磁である。高台外側に明確な稜がつく。

#### その他 (28・29)

28は仏飯碗で渦巻状の文様を描く。底部は露胎である。29は白磁製の鶏形人形の頭部。

### 3. 木製品 (第12・13図・第6表・図版5)

#### 下駄 (1~4)

今回の調査で出土した下駄は種別の判明するものが18点で、すべて溝状遺構からの出土である。分類及び年次ごとの出土数については以下のとおりである。

	1・2次	3次	合計
a) 前のめりの前歯をもつもの (芝翫下駄)	16点	8点	24点
b) 現在でいう下駄に近い形 (駒下駄)	20点	3点	23点
c) 裏面の中央部を削りぬいて歯状にしたもの (庭下駄)	4点		4点
d) 台部分に藁草 (いぐさ) の畳表をつけるもの (草履下駄)	24点	2点	26点
e) 後歯のみを差歯にするもの (のめり後歯型下駄)	1点		1点
f) 前・後歯ともに差歯とするもの (朴歯 (ほうば) 型下駄)	21点	5点	26点

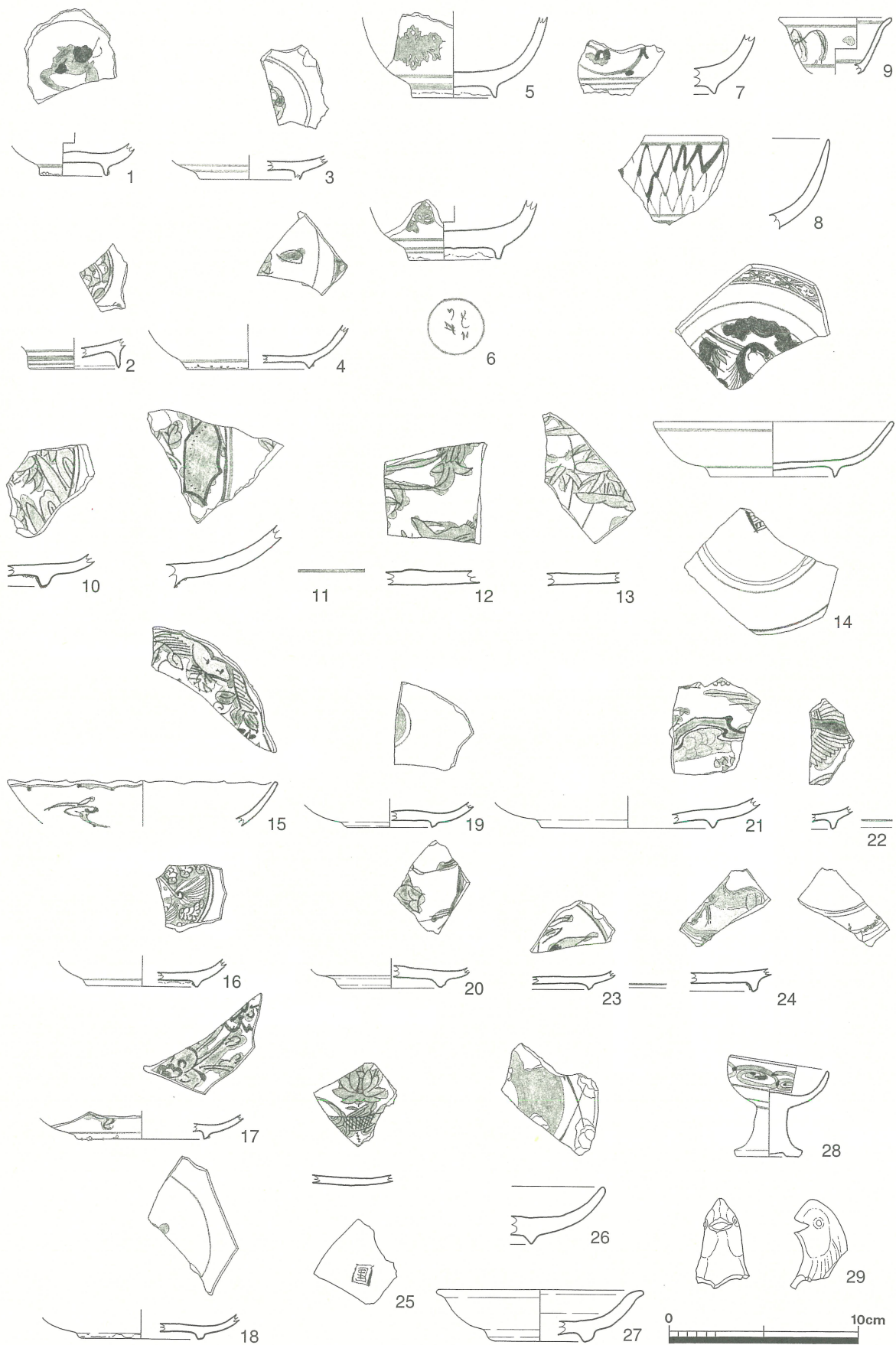
1はf)に属する。台は船底形で、台形の高い歯を有する。2はb)に属する。ともに小児用の下駄であろう。3はa)に属する。4はd)に属し、草履下駄の台部分と思われる。

#### 表札 (5)

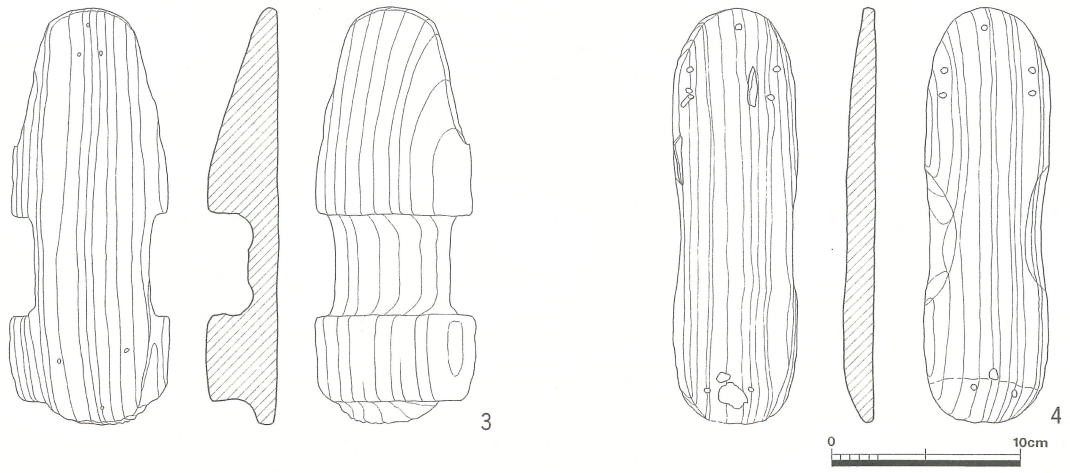
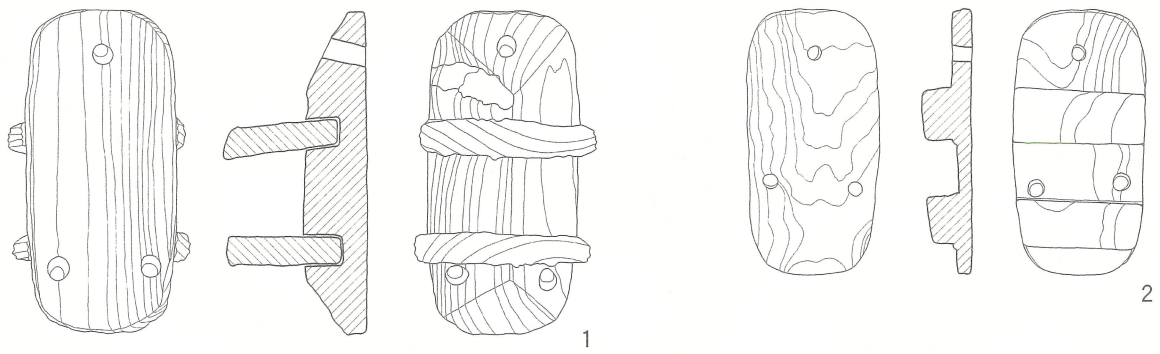
薄い板に墨書があり、上部に釘穴があるので表札と思われる。「公文四郎衛門■■■」か。

### 4. 金属製品 (第14図・第7表・図版5)

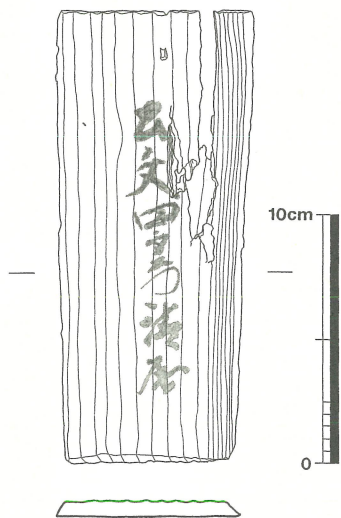
1は煙管の雁首。2・3はともに煙管の吸口。



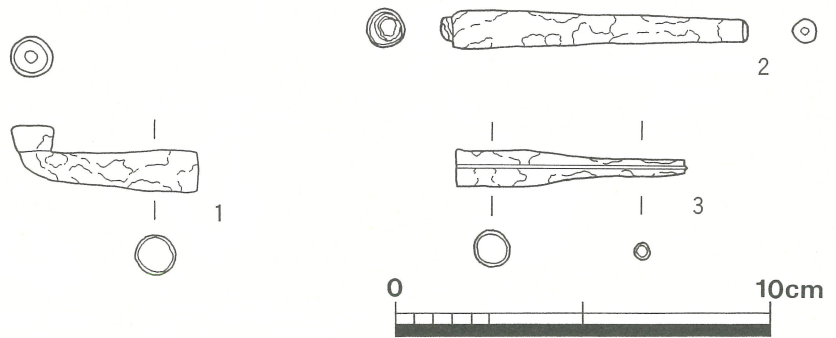
第11图 磁器实测图 (S-1/3)



第12図 木製品実測図① (S-1/4)



第13図 木製品実測図② (S-1/3)



第14図 金属製品実測図 (S-1/2)

挿図	番号	年次	トレンチ	出土層位・遺構	器形	口径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	胎土	施釉部位	釉薬	備考	時期
10	1	2次	表探		唐津碗	11.6	4	6.8	明褐	底部露胎	灰釉	兜金・ちりめんじわ・竹節高台	Ⅱ期
10	2	1次	C-4	I	唐津碗		4.6		灰白	底部露胎	灰釉	高台内渦状ケズリ・竹節高台	Ⅱ期
10	3	1次	B-5	II	唐津碗		4		灰白	底部露胎	灰釉	竹節高台	Ⅱ期
10	4	1次	B-6	II	唐津碗	10.8	4.4	5	灰白	底部露胎	灰釉	高台内平坦・蛇ノ目釉剥ぎ・撥形高台	Ⅳ期
10	5	1次	A-6	III	唐津碗		4.3		灰	壘付露胎	灰釉	ちりめんじわ・兜金	Ⅳ期
10	6	1次	D-1	I	唐津碗		5		灰白	高台内まで施釉	灰釉		Ⅳ期
10	7	1次	D-5		唐津碗		4.8		灰黄	底部露胎	銅緑釉	蛇ノ目釉剥ぎ・高台内渦状ケズリ	Ⅳ期
10	8	2次	A-10	II	唐津碗		4.4		灰白	底部露胎	銅緑釉	高台内渦状ケズリ	Ⅳ期
10	9	1次	C-5	I	天目碗		3.8		灰白	底部露胎	鉄釉		
10	10	3次	A-4	溝6	京焼風碗		3.8		淡黄	底部露胎	透明釉	高台内平坦・水草文(鉄絵)	Ⅲ期
10	11	2次	D-1	溝13	総唐津向付				橙	底部露胎	長石釉	鉄絵	Ⅱ期
10	12	1次	B-3	III	総唐津向付				褐灰	底部露胎	透明釉	鉄絵	I~Ⅱ期
10	13	1次	B-3・B-4	ベルト	総唐津皿		4.6		明赤褐	底部露胎	透明釉	秋草文見込二段・胎土目3箇所	I~Ⅱ期
10	14	1次	B-3・B-4		唐津皿		4		赤褐	底部露胎	灰釉	モミガラ付着・兜金	Ⅱ期
10	15	1次	A-6	III	唐津立縁皿		3.6		赤橙	底部露胎	灰釉		Ⅱ期
10	16	1次	B-3・C-3	I・III	唐津皿		4.6		赤褐	底部露胎	灰釉		Ⅱ期
10	17	1次	B-3	III	唐津皿		4.8		赤褐	底部露胎	灰釉	三日月高台?	Ⅱ期
10	18	1次	A-6		唐津皿		4.8		赤褐	壘付露胎	灰釉		Ⅱ期
10	19	1次	A-8	II	唐津端反皿	12.5	5	3.3	明褐灰	底部露胎	灰釉		Ⅱ期
10	20	1次	B-3	III	唐津丸縁皿	12	3.5	4	橙	底部露胎	灰釉	カイラギ・釉タマリ	Ⅱ期
10	21	1次	B-2	III	唐津立縁皿	10.6	5	2.8	灰赤	高台内まで施釉	灰釉		Ⅲ期
10	22	1次	B-4	IV	唐津皿		5		橙	壘付露胎	灰釉	砂目5箇所・兜金	Ⅱ期
10	23	1次	B-3	III	唐津折縁大皿				褐灰	底部露胎	灰釉		Ⅲ期
10	24	2次	D-2	II	唐津鉢				褐灰	底部露胎	灰釉	刷毛目	Ⅳ期
10	25	1次	A-8	溝	唐津鉢				褐灰		褐釉	口縁頂部ぬぐいとり	
10	26	1次	B-4	II	唐津鉢				灰褐	口縁部のみ施釉	褐釉		
10	27	2次	D-1	I	唐津すり鉢				明褐灰	口縁部のみ施釉	褐釉		Ⅱ期
10	28	2次	C-7	II	唐津鉢				灰白		灰釉	口縁頂部貝目・頂部ぬぐいとり	I~Ⅱ期
10	29	1次	A-6	III	唐津すり鉢				赤褐		焼き締め		Ⅱ期
10	30	1次	D-2・B-3	III	唐津すり鉢				赤褐		焼き締め		
10	31	1次	A-8		唐津壺		16.4		赤褐		灰釉	モミガラ付着・内面格子目タタキ	Ⅲ~Ⅳ期
10	32	1次	C-9		唐津瓶				明黄褐	底部露胎	灰釉		
10	33	1次	A-8	溝	唐津瓶				暗赤褐	高台内まで施釉	灰釉		
10	34	1次	B-5	II	唐津瓶				褐灰	壘付露胎	灰釉		

第4表 陶器観察表

挿圖	番号	年次	トレンチ	出土層位・遺構	器形	口径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	文様				施釉				時期				
									外面		内面		高台		高台			内	外	裏付	附着
									口縁部	体部	底部	口縁部	体部	見込	口縁部	体部					
11	1	2次	D-2	II	青花碗		3.6							施釉	施釉	附着	I~II期				
11	2	2次	D-1	I	青花碗		4.6							施釉	施釉	なし	I~II期				
11	3	2次	D-2	III	青花皿		5			圏線				施釉	施釉	なし	I~II期				
11	4	2次	B-1	土壕C-2	青花皿又は碗		6.4							施釉	施釉	附着	I~II期				
11	5	1次	B-5	III	染付碗		4.4			桐スタンプ				施釉	施釉	なし	IV期				
11	6	1次	B-5	II	染付碗		4.8			桐スタンプ				施釉	施釉	附着	IV期				
11	7	1次	D-4	III	染付碗					梅樹文				施釉	施釉		IV期				
11	8	1次	A-2	I	染付碗					一重罫目文							IV期				
11	9	2次	D-2	H	青花小杯					圏線							II期				
11	10	2次	D-1	溝6	青花大皿		5.8			圏線				施釉	施釉	附着	I~II期				
11	11	2次	D-2	III 2	青花大皿					圏線						附着	I~II期				
11	12	2次	B-1	土壕E-18	青花大皿											附着	I~II期				
11	13	2次	D-1	溝13	青花大皿											附着	I~II期				
11	14			試掘	青花皿		12.6	2.9		四方櫛文				施釉	施釉	附着	I~II期				
11	15	1次	A-9		青花輪花型皿又は鉢		14			草花							I~II期				
11	16	2次	B-1	土壕C-10	青花皿		5.8							施釉	施釉	附着	I~II期				
11	17	1次	B-3	III	青花皿		6.6							施釉	施釉	附着	II期				
11	18	2次	B-1	溝9	青花皿		6.2							施釉	施釉	なし					
11	19	1次	B-3	III	青花皿		4.4							施釉	施釉	なし					
11	20	1次	C-3	III	青花皿		5.2			圏線				施釉	施釉	なし					
11	21	1次	C-6	溝	染付皿		9							施釉	施釉	なし	IV期				
11	22	2次	D-2	I	青花皿									施釉	施釉	なし	I~II期				
11	23	1次	A-7	I	青花皿									施釉	施釉	なし	I~II期				
11	24	1次	B-3	III	青花皿									施釉	施釉	なし	I~II期				
11	25	1次	B-3	III	青花皿									施釉	施釉	附着	I~II期				
11	26	3次	A-4	溝24	染付皿					斜格子				施釉	施釉	なし	IV期				
11	27	2次	D-2	II	白磁皿		10.9	4.8						施釉	施釉	なし	IV期				
11	28	3次	A-4	溝18	染付仏飯碗		5.4	3.3	5.5					施釉	施釉	附着	V期				
11	29	3次	A-4	溝	白磁鶏形人形												IV期				

第5表 磁器観察表

挿圖	番号	年次	トレンチ	出土層位・遺構	種別	計測値(cm)	備考	時期
14	1	3次	A-4	III層	煙管(雁首)	長1.1・火皿径1.6・太さ1.1	青銅製	IV期
14	2	3次	A-4	II層	煙管(吸口)	長7.7・太さ(口側)0.6・ラウ側1.0	青銅製	
14	3	3次	A-4	溝2	煙管(吸口)	長6.1・太さ(口側)0.45・ラウ側0.95	青銅製	

第7表 金属製品観察表

挿圖	番号	年次	トレンチ	出土層位・遺構	種別	計測値(cm)	備考	時期
12	1	3次	A-4	溝・242	下駄	長17.0、台幅7.9、齒幅9.5、高7.4	分類f	
12	2	3次	A-4	溝・179	下駄	長14.0、台幅7.0、高2.7	分類b	
12	3	3次	A-4	溝・179	下駄	長21.9、台幅6.0、高3.8	分類a	
12	4	3次	A-4	溝・168	下駄	長21.9、台幅6.0、高1.5	分類d	
13	5	3次	A-4	溝・134	表札	長18.2、幅8.0、厚0.7		

第6表 木製品観察表



## 第Ⅳ章 ま と め

最後に1～3次調査の概要についてまとめと若干の考察を行いたい。

まず遺物についてであるが、大橋康二氏は肥前陶磁器の時期区分を、

I期—1580年代～1610年代（唐津焼の上限、胎土目積み）

Ⅱ期—1610年代～1650年代（砂目積みへの移行、溝縁皿）

Ⅲ期—1650年代～1690年代（京焼風陶器、呉器手碗）

Ⅳ期—1690年代～1780年代（窯の規模拡大、雑器が陶器生産の中心）

V期—1780年代～1860年代（さらに雑器が陶器生産の中心）

としている（註1）。これに加えて小野正敏氏の染付分類（註2）や他遺跡の出土遺物とを比較検討すると、本遺跡ではI～V期の各時期の遺物が揃っているという結果となった。

陶器では胎土目積み、貝目、青海波タタキ、鉄絵、溝縁皿など、磁器では国産磁器焼成以前（1610年前後）の青花、土師質土器では16世紀後半のものがある。これらはI～Ⅱ期の特徴を見せ、西郷氏から龍造寺家晴への過渡期の時期と矛盾しないものである。その後規格の統一された碗・皿や京焼風の碗を含むⅢ期、コンニャク印判による碗・くらわんか碗に代表されるⅣ期、V期へと推移していく。

I期以前の時期の遺物としては、弥生土器・土師器・青磁（13世紀末～14世紀初）・白磁（11世紀後半～12世紀前半）・石鍋（12世紀後半～13世紀前半）などが出土したが、1・2次調査において出土が見られなかった小野編年染付皿C群（碁笥底）は3次調査においても出土しなかった。

次に遺構としては、溝状遺構・道路状遺構・鑄造関連土壌群を検出した。溝状遺構・道路状遺構は空中写真や字図（『沖城跡』29ページ）に見られる旧地形に対応する方向と位置で確認され、沖城が城の内外を溝状遺構で区画されているとの指摘をした。検出された溝は混入する遺物から見て、昭和37年からの土地改良事業時に埋没したものと、B-1～D-1溝のように、16世紀末～17世紀初頭に埋没したものがあり、埋没の時期に差があることがわかった。また、今回A-4で検出した溝状遺構に伴う杭列は、年代測定の結果、 $150 \pm 40 \text{ y. B. P.}$ （1760～1840年）の値が出た。これはⅣ～V期の年代であり、検出されたすべての溝状遺構が必ずしも築城当時からのものではないこともわかった。

鑄造関連土壌群については、鑄羽口や被熱した砂岩塊、粘土塊、砂、炉の部材や坩堝、砥石が出土したことから、検出された複数の土壌は「鑄造」に関連する遺構であると考えられる。時期は16世紀末～17世紀初頭のもので、B-1～D-1溝と同時期に廃棄されたものと思われる。

「城島」・「大堀端」などの小字名や古地図から、沖城は西郷氏によって築かれた支城であると認識されていた。1～3次調査では城の存在が遺物の年代から裏付けされ、また城に伴うと

考えられる遺構が検出されたことは大きな成果であった。

前回報告で「少なくとも遺物の面からは西郷氏築城説を積極的に支持する根拠には乏しいのではないか」としたが、これは根拠となる資料がなかったうえに、小野分類皿C群（15世紀後半～16世紀中頃の年代）をはじめとする、西郷氏の時期の遺物が乏しいことによるものであった。

沖城と同じく西郷氏の支城とされる尾和谷城は文献資料等により、1474年頃には大村との境目の城として存在し、1572年・1574年頃には築城されていたと言われていたが、平成15年に実施された発掘調査ではこの時期の遺物や建物跡が出土し、これが裏付けられた（註3）。またここでは小野分類皿C群などの15世紀代の遺物がまとまって出土している。

沖城の築城者については、なお不確定な要素があり、断定はできないが、築城者が西郷氏であれば、その時期は、尾和谷城以降で家晴に攻められる（1587年）直前の時期・小野分類皿C群の消滅後と考えられる。尾和谷城の存在は西郷氏と大村側との緊張関係を示すと思われるが、16世紀後半に西郷氏にとっての対外的な緊張関係が有明海側に発生したことが要因となり、沖城を築くに至ったのではないだろうか。

註1 大橋康二「I 九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会）2000

註2 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982

註3 諫早市教育委員会『尾和谷城跡』諫早市文化財調査報告書 第16集 2004

#### 【参考文献】

- 長崎県教育委員会「万才町遺跡」長崎県文化財調査報告書 第123集 1995  
長崎県教育委員会「桜町遺跡」長崎県文化財調査報告書 第144集 1998  
長崎県教育委員会「森岳城跡」長崎県文化財調査報告書 第166集 2002  
長崎県教育委員会「玖島城跡」長崎県文化財調査報告書 第167集 2002  
長崎市教育委員会「筑町遺跡」1997  
長崎市教育委員会「興善町遺跡」1999  
長崎市埋蔵文化財調査協議会「銅座町遺跡」1993  
長崎市埋蔵文化財調査協議会「栄町遺跡」1993  
長崎市埋蔵文化財調査協議会「万才町遺跡」1996  
長崎市埋蔵文化財調査協議会「桜町遺跡」2000  
平戸市教育委員会「平戸和蘭商館跡」平戸市の文化財25 1988  
平戸市教育委員会「史跡 平戸和蘭商館跡Ⅱ」平戸市の文化財29 1989  
平戸市教育委員会「平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ」平戸市の文化財34 1992  
平戸市教育委員会「平戸和蘭商館跡の発掘Ⅳ」平戸市の文化財35 1993  
九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年」2000

# 付編 放射性炭素年代測定分析結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

諫早市仲沖町と幸町の境界に所在する沖城跡は、現在の本明川と半造川の合流地点に位置する。既存の資料によれば、築城当時は直に有明海とつながった岬状の突端部位置していたと推測されている。本遺跡は、中世に諫早を治めていた西郷氏が支城として築いたとされる館跡で、後の1587年に当地に入った龍造寺家晴が隠居したとされている。これまでの発掘調査では、溝状遺構や鑄造関連土壙群、中世～近世の遺物などが確認された。

今回の発掘調査区では、平成9・10年度に行れた調査区と異なり、溝状遺構に杭列を伴う状態が確認された。そこで、この溝が城に伴うものか検討するため、放射性炭素年代測定を実施して杭の年代に関する情報を得る。

## 1. 試料

試料は、A-4区の溝状遺構に伴って出土した杭列の杭材（試料番号10）の1点である。直径約10cm程度である。杭材の一番外側、年輪1-2年分の木材片（0.6g）を採取し、年代測定試料とした。

## 2. 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、木材は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

## 3. 結果

結果を表1・2に示す。杭材の樹種は、アカマツに同定される。また、年代測定の結果は、測定年代が $250 \pm 30$  B P、補正年代が $150 \pm 40$  B Pの測定値が得られる。暦年較正結果も考慮すると、本杭材は、17世紀後半から19世紀前半頃に相当する年代となる。この年代値に基づくと、杭材となった木材は、近世頃に伐採された可能性がある。

表 1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

調査区	遺構	試料番号	性質	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code. No.
A-4	溝状遺構	10	杭	木材	アカマツ	150±40	-30.97±0.76	250±30	IAAA-42068

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\delta$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 2 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	Code No
1	149±35	cal AD 1,670 - cal AD 1,695	cal BP 280 - 255	0.176	IAAA-42068
		cal AD 1,726 - cal AD 1,779	cal BP 224 - 171	0.375	
		cal AD 1,799 - cal AD 1,813	cal BP 151 - 137	0.107	
		cal AD 1,837 - cal AD 1,843	cal BP 113 - 107	0.034	
		cal AD 1,852 - cal AD 1,868	cal BP 98 - 82	0.099	
		cal AD 1,872 - cal AD 1,876	cal BP 78 - 74	0.016	
		cal AD 1,918 - cal AD 1,943	cal BP 32 - 7	0.181	
		cal AD 1,951 - cal AD 1,952	cal BP - 1 - - 2	0.011	

- 1) 計算には、RADICARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\delta$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

# 圖 版

図版 1



調査地点全景



溝状遺構検出面  
(南側から)



溝状遺構検出状況  
(上の写真と同一方向から)



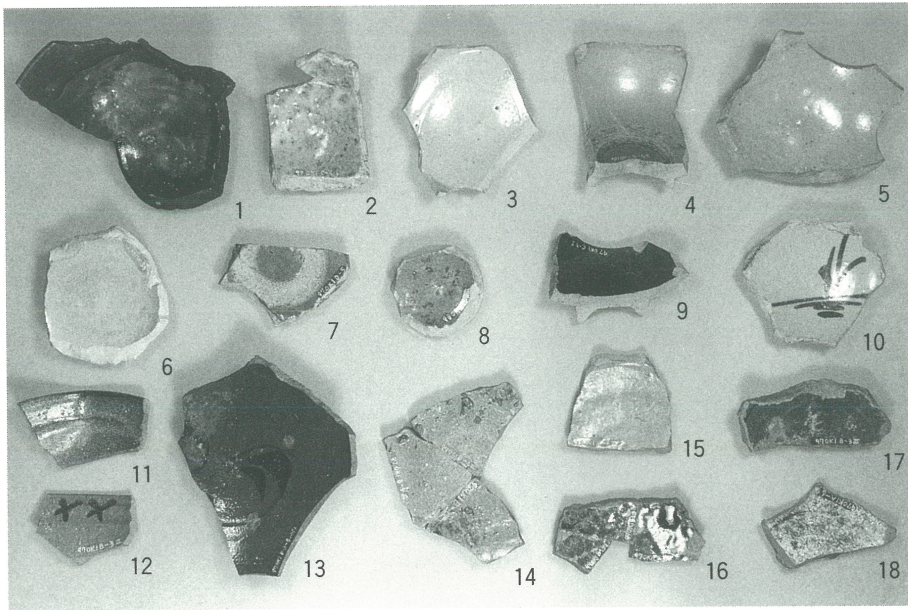
溝状遺構検出状況  
(北側から)



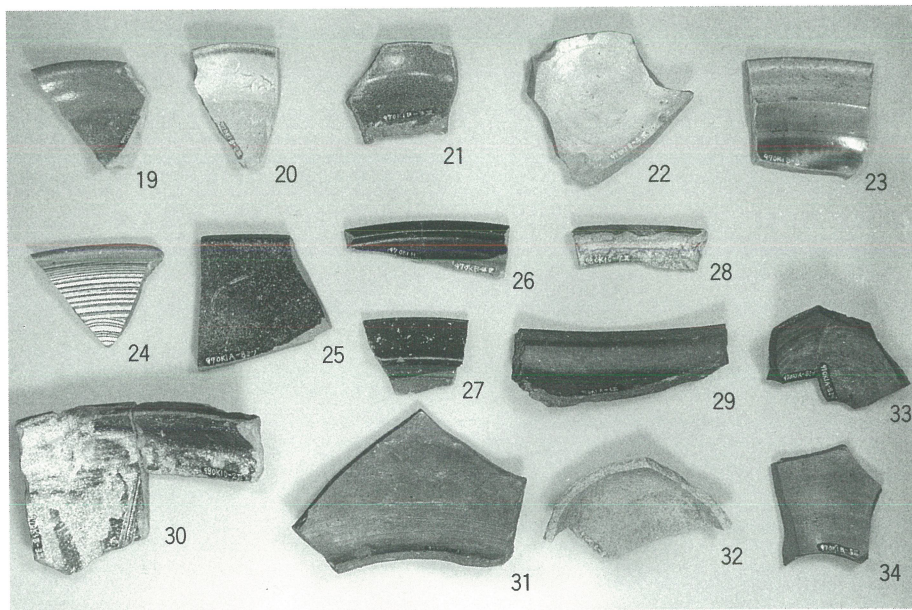
溝状遺構検出状況  
(南側から)



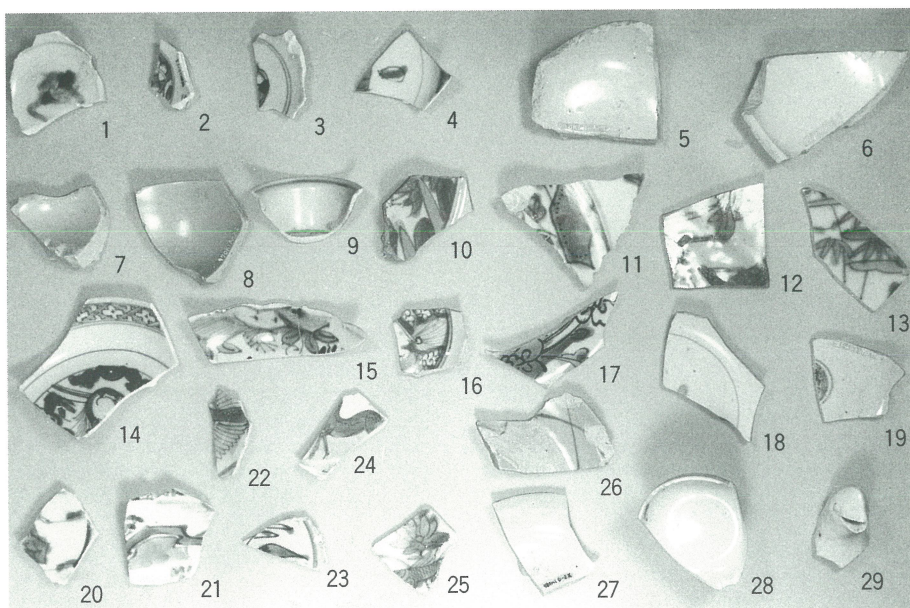
溝状遺構に伴う杭列  
(南側から)



陶器 (内面)

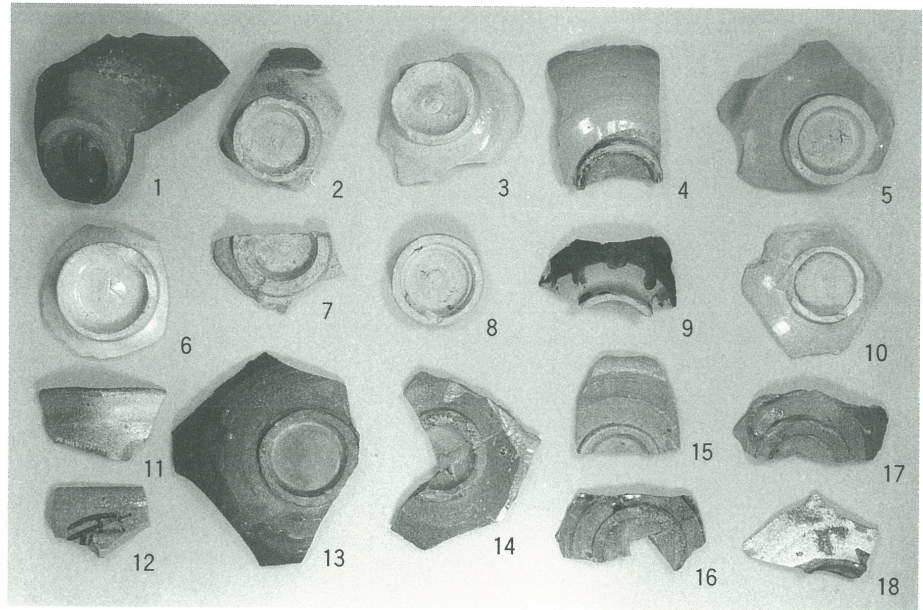


陶器 (内面)

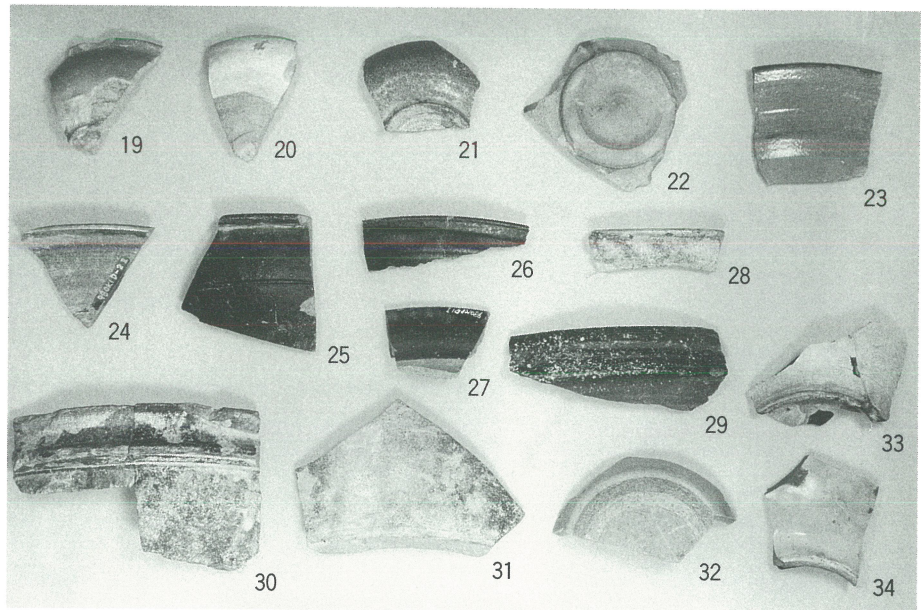


磁器 (内面)

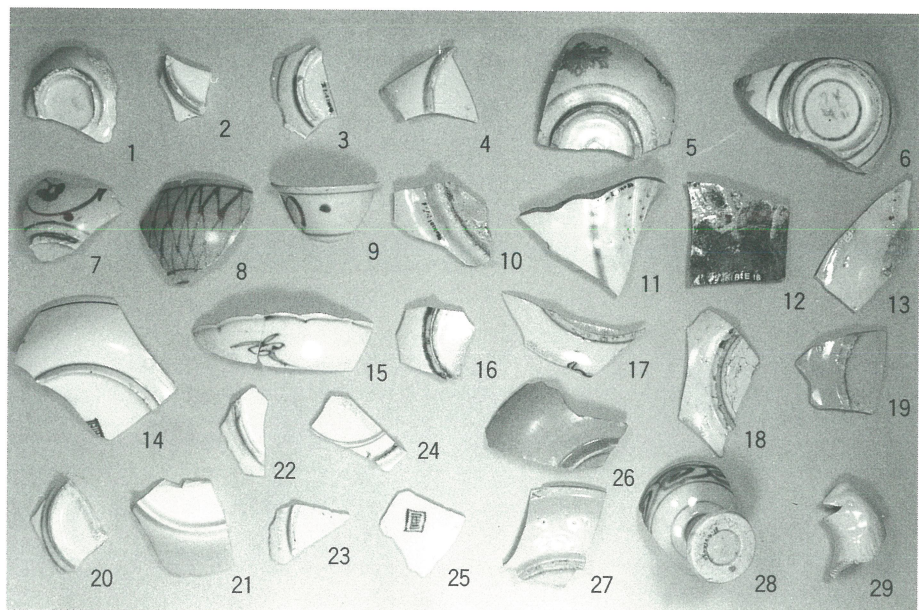




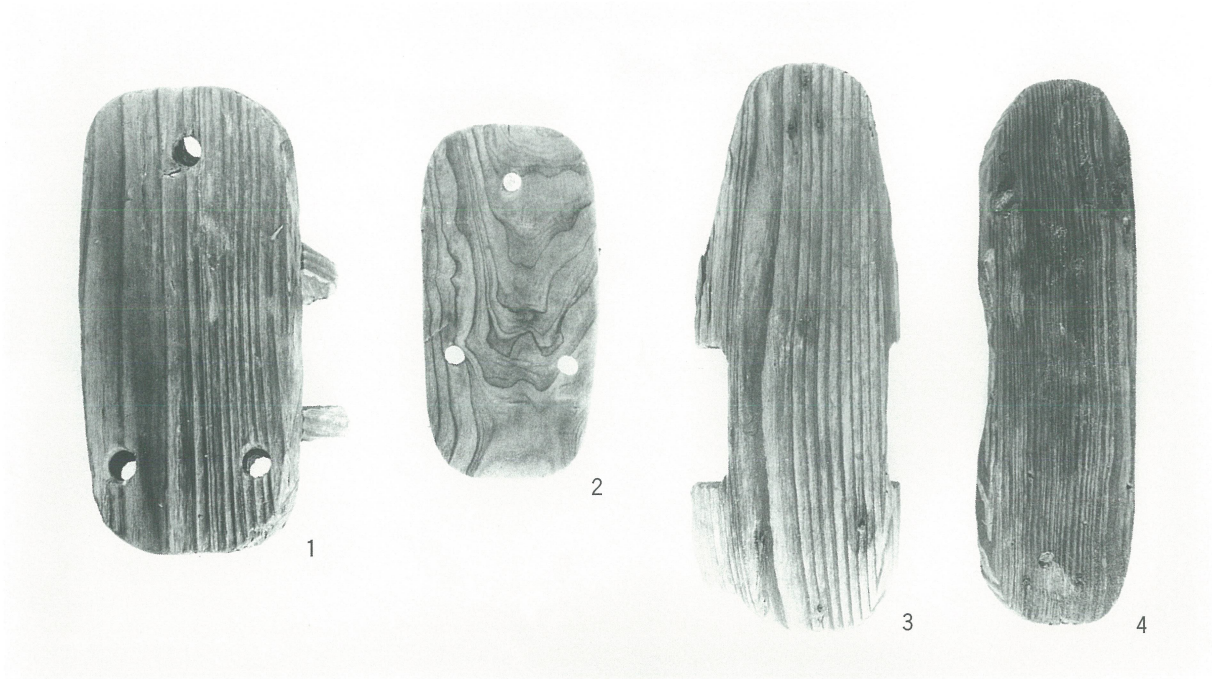
陶器 (外面)



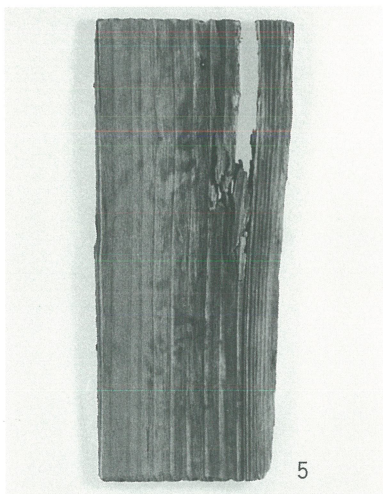
陶器 (外面)



磁器 (外面)



木製品 (下駄)



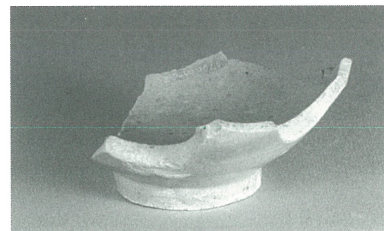
木製品 (表札)



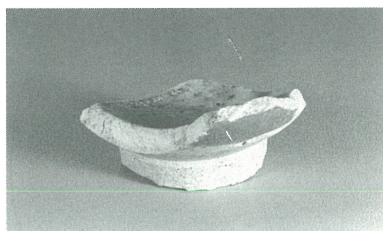
金属製品



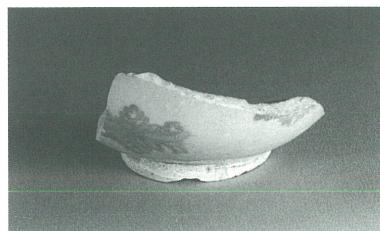
第10図 1



第10図 5



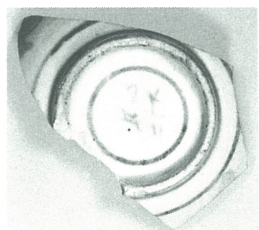
第10図 2



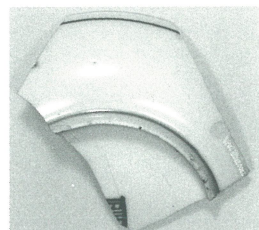
第11図 5



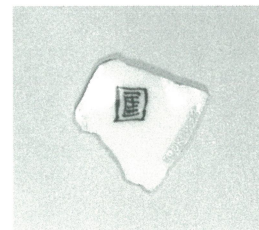
第11図 28



第11図 6



第11図 14



第11図 25

# 報告書抄録

ふりがな	おきじょうあと								
書名	沖城跡Ⅱ								
副書名									
巻次									
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第18集								
編著者名	川瀬雄一								
編集機関	諫早市教育委員会								
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号 TEL0957-22-1500								
発行年月日	西暦2005年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
おきじょうあと 沖城跡	ながさきけん 長崎県 いさはや 諫早市 なかつち 仲沖町 さいわい 幸まち	42204	84-86	32度 50分	134度 30分	20041110～ 20041216	120m <sup>2</sup>	道路拡幅	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
沖城跡	城跡	中～近世	溝状遺構 杭列	輸入磁器 国産陶磁器 瓦 木製品 金属製品	城跡を囲んでいた と思われる溝・杭 列を確認。				

諫早市文化財調査報告書 第18集

## 沖城跡Ⅱ

平成17年3月31日

発行所 諫早市教育委員会  
諫早市東小路町7番1号

印刷所 (株)昭和堂  
諫早市長野町1007-2

